前線と雲

（表紙写真説明）

最近，新聞社ならでは撮りえない写真が，そして，気象学的にも興味のある写真が数多く提供されるようになったのは，非常に喜ばしいことである．

この写真もその一つで，前線上にできた雲の見事な遠景がとらえられている．

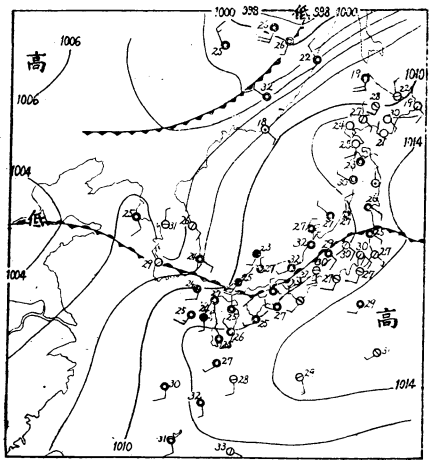
昭和30年7月9日14時ごろ，東京湾口，高度17,000フィート約6,000メートルの所から，北の方，東京方面にカメラを向けてシャッターを切ったのがこの写真で，左側に見えるのが三浦半島，右側が房総半島で，東京湾の北方には積乱雲をまじえて雲の峯がはるかに連なって，見事な景観を呈している．当日15時の天気図をかかげておいたが，停滞前線が西日本から東に伸びて関東地方を横断している．この前線は，梅雨前線の弱まったもので，4，5日ころから大体同じ位置に停滞し，翌10日からこの前線は北上して北海道を横断して東西に走るようになった．

15時の天気図上の前線の位置と，雲の連峯の位置とは非常によく一致しており前線上に発生した雲であることは雲の形からも明らかである．

試みに，中央気象台予報課の資料にもとずいて，当日の雷雲発生位置を見るに，秩父方面に14時50分に観測され始めた雷雲がある．（この雷雲が当日観測された最初の雷雲）．この写真の左に，現在発達しつつある積乱雲が見られるが，この雲が最初に観測された雷雲となったと見るのはうがちすぎるだろうか．

このような写真が集まって，気象写真集ができ，視覚的にも気象学が勉強できるようになればいいなあと思うのは筆者だけではないだろう．

（奥田穣）



昭和30年7月9日15時

日本雪氷学会創立について

日本雪氷協会はこのほど発展的解消をとげて新たに日本雪氷学会が発足した．

去る8月23，24日の両日東京産経会館で旧日本雪氷協会の最後の定期講演会ならびに解散総会が開かれ，これに引続いて，日本雪氷学会の創立総会が行われて暫定的な定款と役員が決定した．

旧日本雪氷協会は昭和14年3月，当時平田徳太郎，黒田正夫，山口弘道等の諸氏が中心になっていた「雪の会」が発展して発足したもので，機関紙「雪氷」を発行する外，論文集，「雪氷十年」，「雪氷の研究」2巻を刊行，又諸種の委員会を作って雪の性質の研究や雪害防除対策に主導的役割を果して来た．殊に戦前は樺太や満洲のような酷寒地をかかえていたため当面する問題も多く，会誌の投稿も活況を呈した．戦後は他学会と同様，一時苦境に陥ったが会員の努力によりよく会誌の発行を続け，今年で16巻を数えるに至った．最近の雪氷の研究は北大低温科学研究所をはじめとして鉄道，農林等の応用部面でも戦前を凌ぐ華やかさであり，又その水準も諸外国にひけを取らないところまで来ているので，協会から学会への発展はまさに時を得たものであり，雪氷学の今後の飛躍的発展が期待される．

雪氷学は降雪や積雪．海陸氷などの基礎的問題から，農林，鉄道，電気，建築，土木，医学，厚生，経済等実社会のあらゆる方面にまで及んでいる学問なので，学会活動のあり方も，他の学会とはちがって諸分野の相互連絡といつた部面が極めて重要である．雪氷学の国際機関としてはＩＵＧＧの水文学部会の中に雪氷委員会があるが，一国の中に雪氷学会があるのは日本だけのようである．これは国土の約半分が半年の間雪に埋もれているという特殊の気候条件によるものであろう．それだけに日本雪氷学会の活動にまつところも大きいわけである．

なお，暫定定款にもとずいた役員選挙が10月31日に実施されることになっており，それによって選出された役員の手で学会の民主的な運営と活動が発足し，又正式の定款案が審議される．会誌「雪氷」は協会から引継いで継続発行されるが，その内容や体裁も面目を一新して充実したものになる予定で，当分は隔月発行である．会費は年額500円．

（今井一郎）

編集後記　学会賞で輝く黒岩博士の労作と梅田さんの珠玉と表紙の関東不連続線は本号の誇りです．台風は不作でも地方色豊かな研究や調査は豊作なことでしようからどしどし投稿して下さい．7月号の歴史ものは好評でした．地方で歴史的な資料を秘蔵しておられる方がありましたらぜひ公開して下さい．こういう面からもわれわれの立場を顧みるのはきわめて有意義と思います．読者各位の御健勝を祈ります．（伊東彊自）